

第四章 浮舟と匂宮の物語 浮舟、匂宮に見つかり言い寄られる

[第一段 匂宮、二条院に帰邸]

車引き出づるほどの(守夫人の車を引き出している内に)、すこし明うなりぬるに(少し明るくなって来た時分に)、宮、内裏よりまかでたまふ(匂宮が御所からお帰りなさいました)。若君おぼつかなくおぼえたまひければ(宮様は若君に会いたくお思いになって)、忍びたるさまにて(簡素な様式で)、*車なども例ならでおはしますにさしあひて(車などもいつもとは違う小型車でいらっしゃったのに出会ったので)、おしとどめて立てたれば(夫人の車は止まって待っていると)、廊に御車寄せて降りたまふ(匂宮は中門廊に御車を寄せてお降りになります)。*「車なども例ならでおはします」は注に<親王である匂宮の常用の車は檳榔毛の車。ここは微行の体なので、網代車であろう。>とある。小型車なら車寄せも乗降も簡単で早いだろう。

「なぞの車ぞ(何の車か)。暗きほどに急ぎ出づるは(暗い内から急いで出て行くのは)」

と目とどめさせたまふ(と宮は夫人の車に目を止めなさいます)。「かやうにてぞ、忍びたる所には出づるか(こんな風によく男は、忍び通いの女の所から出て行くもんだが)」と、御心ならひに思し寄るも(と宮が御自分の経験から思い付きなされるのも)、*むくつけし(当然の成り行きとあったところでしょうか)。*「むくつけし」は<不穩だ>くらいの言い方かもしれない。が、敢えて此処では面白がって、「向く付く(向きになる=成り行く)」の下二段連用形に強調の副助詞「し」が付いた言い方、と読んでみたい。

「常陸殿のまかでさせたまふ(常陸殿がお帰りになるところです)」

と申す(と夫人の従者が申します)。若やかなる御前ども(若輩の宮の従者たちが)、

「殿こそ、あざやかなれ(殿とは凄いな)」

と、笑ひあへるを聞くも(と笑い合っているのを聞くのも)、「げに、こよなの身のほどや(なるほど、宮家にあっては是が私の身の程か)」と悲しく思ふ(と守夫人は悲しく思います)。ただ(それでも)、この御方のことを思ふゆゑにぞ(娘御の立場を思えば)、おのれも人びとしくならまほしくおぼえける(自分も人並みの身分でありたいと思うので)、まして、正身をなほなほしくやつて見むことは(まして娘本人を並の身分に貶めて結婚させるのは)、いみじくあたらしい思ひなりぬ(非常に勿体無く思うのです)。

宮、入りたまひて(匂宮は御方の部屋に入りなさって)、

「常陸殿といふ人や、ここに通はしたまふ(常陸殿という人を此処に通し入れていらっしゃるのですか)。心ある朝ぼらけに(情緒深い夜明け前に)、急ぎ出でつる*車副などこそ(急いで出て行く車の供侍などが)、ことさらめきて見えつれ(弥に目に付きましたが)」 *「車副(くるまぞひ)」は<牛車の左右に付き添った従者。>と古語辞典にある。

など、なほ思し疑ひてのたまふ(などと、やはり疑いなさって仰います)。「聞きにくくかたはらいたし(そのようなあらぬ疑いは、聞きたくないし外聞も悪い)」と思して(と御方がお思いになって)、

「大輔などが若くてのころ(女房の大輔の君の若い頃の)、*友達にてありける人は(友達だった人ですよ)。ことに今めかしうも見えざるを(別に派手にしているも見えないないでしょうに)、ゆゑゆゑしげにもものたまひなすかな(訳あり気に仰るんですね)。人の聞きとがめつべきことをのみ(人聞きの悪そうなことばかり)、*常にとりないたまふこそ(いつも仰るのは)、*なき名は立てで(「無き名は立てで」と古歌にある通りの無用の邪推です)」 *「ともだち」は今日でも日常語だが、当時の語感は今と同じなのだろうか。「ともどち」という言い方もあるようだが、いくらか違う語用なのだろうか。あまりに今の語と近い語用をされると落ち着かない、というのも妙な気分だ。 *「常にとりないたまふ」は、匂宮が薫殿の残り香を疑った件を指しているのだろうが、それに付いては全く事実無根とは言い切れない微妙な事情だったかとも思えるが。 *「なき名は立てで」の「で」は、古語辞典に<打消しの助動詞「ず」の連用形に、接続助詞「て」がついて、音韻変化したもの>と説明されている接続助詞で<～しないで>という言い方だから、「なき名は立てで」は<無実の罪を着せないで>となり、現代語でもこの言い方で拒否表現になるし、拒否だけに荒々しい口調が相応しいので紛らわしいが、是は下に「たまへ(～して下さい)」が省かれた雑な言い方だ。だから、こういう蓮っ葉な言い方が匂宮に対して成立するのは、洒落語用の場合に限られるだろう。それにまた、是は「こそ」を受ける文末が已然形になるという文型の据わり(例えば「たまふべけれ」とか)にも反した語用でもある。で、是は必ず下敷きのある言い回しということらしく、注には<『源氏積』は「思はむと頼めしこともあるものをなき名は立てでただに忘れぬ」(後撰集恋二、六六二、読人しらず)を指摘。>とある。引歌は<愛し合う相手と信じたこともある人なのだから邪推は止めて忘れてしまいなさい>ということ、いかにも悪口は自分を貶めるという因果を含めるような説得らしい。一般に、拒否は単純に断られた方が収束し易いような気がするが、どうなんだろう。

と、うち背きたまふも(と顔を背けなさるのも)、らうたげにをかし(可憐で美しい)。

*明くるも知らず大殿籠もりたるに(匂宮は御方と懇ろに朝が明けても平気で遅くまで西の対の御部屋に籠もっていらっしゃったが)、*人びとあまた参りたまへば(来客の高官たちが多数お見えになったので)、寝殿に渡りたまひぬ(正殿にお出向きなさいました)。後の宮は、ことごとしき御悩みにもあらで(皇后は重篤な御病状ではいらっしゃらず)、おこたりたまひにければ(平癒なされたので)、心地よげにて(明るい雰囲気で)、右の大殿の君達など(源右大臣の御子息たちは)、碁打ち韻塞などしつつ遊びたまふ(碁を打ったり韻字当てなどして遊んでいらっしゃいます)。 *「明くるも知らず大殿籠もりたる」は注に<『異本紫明抄』は「玉簾明くるも知らで寝しものを夢にも見じと思ひけるかな」(伊勢集)を指摘。>とある。引歌の意味(筋というより背景、従って其を引く意味も)が分からないのでウェブ検索すると、この言い回しは桐壺卷二章三段にも引かれている有名な下敷き歌らしく、この伊勢の歌は亭子院(ていじのゐん、讓位後の宇多天皇)が長恨歌(白楽天が書いた玄宗皇帝と楊貴妃の恋物語の詩)を題材にして書いた絵を前にして詠んだ歌で、政務も顧みずに愛した楊貴妃に、その死後は夢にでも逢えなくなってしまった、という玄宗皇帝の嘆きに同情したもの、らしい。「たますだれ」は美称というよりは<朝堂=御所正堂>を示すのだろう。つまり「明くるも知らず大殿籠もりたる」はただの朝寝坊ではなく、女に溺れた様をいうもので、だから「人びとあまた参りたまへば」の前振りに利いた言い回しになっているようだ。そういう背景事情まで持ち出してしまうのは折角の洒落語用に対しては冗長気味だが、かといって、是をただの朝寝坊のように言うのも気が利かないので、匂宮は御方といちゃついて部屋籠もりしていたとまでは明示補語したい。 *「人びと」は注に<夕霧の従者

たち。>とある。が、「参りたまふ」という敬語遣いであり、下文に「右の大殿の君達など」とあるので、従者とか役人というよりは、高官たちの来客というべきだろう。

[第二段 匂宮、浮舟に言い寄る]

夕つ方、宮こなたに渡らせたまへれば(夕方になって匂宮が西の対へおいでになると)、女君は、*御ゆするのほどなりけり(夫人は御洗髪中なのでした)。人びともおのおのうち休みなどして(女房たちもそれぞれ部屋に下がって休んだりして)、御前には人もなし(御部屋には誰も居ません)。小さき童のあるして(小さい童女が居たので)、*「ゆする」は<洗髪>とのこと。水中で髪を揺する、ということだろうか。

「折悪しき御ゆするのほどこそ(間が悪く御洗髪中とは)、見苦しかめれ(困りました)。さうざうしくてや(することも無いので)、眺めむ(庭でも眺めています)」

と(と宮は湯殿の夫人に)、聞こえたまへば(言伝を申しなさると)、

「げに(本当に)、おはしまさぬ隙々にこそ(宮様がいらっしゃらない内に)、例は済ませ(いつもは済ませています)。あやしう日ごろももの憂がらせたまひて(生憎とこの数日は気分が優れずにいらっしゃって)、今日過ぎば(今日を逃すと)、この月は日もなし(今月は終わりです)、*九(九月は忌月で)、十月は(十月は神無月なので)、いかでかはとて(仕方なく)、仕まつらせつるを(今日御洗髪仕っております)」 *「く、じふぐわちは」は注に<洗髪入浴は吉日に行われた。『花鳥余情』は「九月は忌む月なり。十月はかみなし月にて髪あらふにはばかりなるべし」とある。現在は八月。>とある。「今日過ぎばこの月は日もなし」はこの日が八月末日であることを指し示している、ことになる。

と、大輔いとほしが(と大輔の君が申し開いて謝ります)。

若君も寝たまへりければ、*そなたにこれかれあるほどに(若君も寝ていらっしゃって、その子供部屋の方に主だった女房も居た時だったので)、宮は*たたずみ歩きたまひて(話し相手もいないので、宮は辺りを歩き回りなさって)、*西の方に例ならぬ*童の見えつるを(西廂の間に見掛けない童女が居たのを)、「今参りたるか(新しく来た者か)」など思して、さし覗きたまふ(などとお思いになって覗き込みなさいます)。 *「そなた」は注に<若君の寝ている所。>とある。が、それが何処なのか知りたいところだ。若君の部屋は、今までの例からすると、西の対ではなく、寝殿の西か東の一角を宛がわれるような気がするし、母親が西の対にいるのだから寝殿の西側の可能性が高いと思うが、どうなんだろう。さっぱり分からない。 *「たたずみありく」は<あたりをうろつく。>と古語辞典にある。 *「にしのかた」は注に<西の対の西廂。その北側に浮舟がいる。>とある。 *「わらはのみえつる」は童女が子供だけに声を上げたり、仕切りから不意に出てきたりすることを言っているのだろうか。実は、この辺の既述の状況は良く分からない。匂宮は御方の部屋である母屋に居るように思うが、歩き回っているのだから廂へ出ているのかも知れない。

*中のほどなる障子の(西廂との間の北側奥の襖戸が)、細目に開きたるより見たまへば(細目に開いていた所から宮が覗いて御覧になると)、障子のあなたに(襖戸の向こう側に)、一尺ばかりひきさけて、屏風立てたり(30センチほど離して屏風が立ててあります)。そのつまに(その脇に)、几帳、簾に添へて立てたり(几帳を簾に添えて立てて間仕切りしてあります)。*唯一重をうちか

けて(その几帳は垂れ布の一枚を横棒に跳ね上げて逢って)、*紫苑色のはなやかなるに(青紫色の明るい着物に)、*女郎花の織物と見ゆる重なりて(黄色い織物の打ち掛け着を重ねているように見える)、袖口さし出でたり(袖口が覗き見えました)。屏風一枚たたまれたるより(屏風一枚が折り畳まれていたので)、心にもあらで見ゆるなめり(思いの外に良く見えるようです)。*「中のほなる障子」は何処の何か。ただ、下文に「この廂に通ふ障子を」という言い方があるので、この「障子」は母屋と廂を仕切る<襖引戸>で、匂宮は当然に母屋側に居て、西廂に設けられた客人の間を覗いてはいるのだろう。で、その客人の間だが、是は西廂と言っても、二章四段に「西の廂の北に寄りて人げ遠き方に局したり」とあり、その北側の目立たない所に「ここには御物忌と言ひてければ人も通はず」(二章四段)と人払いして常陸女たちは滞在していたので、此处で言う「中のほど」は母屋の南北の真ん中のことではなく<奥まった北側>のことと取るのが妥当だ。「なか」は<中央部分>を言う場合の他に<奥側>を言う場合はある。*「帷(かたびら)」は几帳に使われている数枚の細長い垂れ布で、此处ではその内の一枚を横棒に掛け上げてある状態を示した説明をしているらしい。*「しをにいろのはなやかなる」は注に<以下、浮舟の衣装。匂宮が見た袖口の色。>とある。女の姿が見えている、というのはちょっとした事件だ。尤も、廂部屋に居る女なので、匂宮は常陸女を新参女房と思っただろう。紫苑色自体はウェブの色見本では明るい薄青紫。*「をみなへしのおりもの」は打ち掛け上着らしい。女郎花の色見本は白に近いほど淡色の赤黄色だが、女郎花の花は黄色で、言葉の印象では黄色だ。

「今参りの口惜しからぬなめり(新参の上臈らしい)」と思して(と宮はお思いになって)、この廂に通ふ障子を(この廂の間に通る襖戸を)、いとみそかに押し開けたまひて(ごく密かに押し開けなさって)、*やをら歩み寄りたまふも(静かに戸口に立ち寄りなざるのを)、*人知らず(常陸女は気付かず)、*こなたの廊の中の壺前栽の(北廊下の中庭の)、いとをかしう色々に咲き乱れたるに(秋の花が風情良く色々に咲き乱れている所に)、遣水のわたり、石高きほど、いとをかしければ(水路の側の陰し気な置石がとても情緒があったので)、端近く添ひ臥して眺むるなりけり(縁側近くに脇息に寄り掛かって眺めて居たのです)。*「やをら歩み寄りたまふも」は宮が母屋から廂に入ったのかと思っただろう、下文に「障子を今すこし押し開けて」とあるので、此处では今まで座して戸の隙間から覗き見していた宮が戸口に立ち上がった、ということらしい。*「ひと」は<常陸女>以外の者であるはずがなく、「知らず」は連用中止で下文に続く。*「こなたのらう」は北西廂の間に続く廊下だから、「なかのつぼせんざい」は北の対屋ないし倉庫などへ続く廊下に面した中庭だろう。

開きたる障子を、今すこし押し開けて、屏風のつまより覗きたまふに(宮は開けた戸を更に少し押し開けて屏風の脇から覗き込みなざると)、宮とは思ひもかけず(その人の気配を、常陸女は匂宮とは思ひもよらず)、「例こなたに来馴れたる人にやあらむ(いつもこの部屋に来馴れている係りの女房だろう)」と思ひて、起き上がりたる様体、いとをかしう見ゆるに(と違って起き上がった姿勢がとても美しく見えたので)、例の御心は過ぐしたまはで(宮は例の好色心から見過ごしなされずに)、衣の裾を捉へたまひて(女の衣服の裾を掴みなさって)、こなたの障子は引き立てたまひて(後ろの襖戸は閉めなさって)、屏風のはさまに居たまひぬ(屏風の後ろとの隙間に座りなさいました)。

あやしと思ひて、扇をさし隠して見返りたるさま、いとをかし(変に思って扇で顔を隠して振り向いた女の仕種はとても魅力的です)。扇を持たせながら捉へたまひて(宮がその扇を持った女の手を押さえなさって)、

「誰れぞ(其処許は誰か)。名のりこそ、ゆかしけれ(名が知りたい)」

とのたまふに(と仰るので)、*むくつけくなりぬ(女は恐ろしくて動けなくなりました)。*「むくつけし」は大辞泉に<無骨(ぶこつ)である。無作法である。無風流である。現代語としては、「むくつけき大男」のように連体形だけが用いられる。>とあり、他に<気味悪い。不気味である。>また<常軌を逸していて恐ろしい。>ともある。古語辞典には<いとわしい。いやだ。>ともあり、不愉快な事態に遭遇して、自分では解決出来ず対処に困る閉口感から、その場を立ち去りたい忌避すべき拒否感ということでは、取っ付き難い馴染めなさがある、現代語の「ムカツク」にも通じそうだが、ムカツクの反発心とは違って、「むくつけし」には<歯向かい難し=対抗できない無力感>という語感が強い印象だ。此处では、恐怖心から身動きできないと読んで置く。

さる*もののつらに(宮はそのように屏風の隅に)、顔を他さまにもて隠して(顔を横に背けて)、いといたう忍びたまへれば(もう丸でふざけて隠れん坊をしていらっしゃるので、「このただならずほのめかしたまふらむ大将にや(当の熱心に言い寄っていらっしゃるといふ源氏大将本人ではないかしら)」、*香うばしきけはひなども思ひわたさるに(と、常陸女は芳しい気配からしても思い及ばれるので)、いと恥づかしくせむ方なし(とても極まり悪く身の置き所がありません)。*「もののつら」の「つら」は<表面>ではなく<一番外側の部分=端つつら=隅っこ>のことらしい。この言い回しから、此处の文意を、匂宮が子供みたいに悪戯けてみせている場面、と読むべきなのだろうか。もう、そうに違いないと決め付けて、左様に「忍ぶ」を言い換えて置く。*「かうばしきけはひ」は「けはひ」に「御」が付かないからか、渋谷校訂では常陸女の内心文括弧に囲まれているが、「かうばしきけはひ」は私には如何にも説明口調に聞こえる。確かにこの文は常陸女が主語の、その目線での語りではあるだろうが、未特定の不審者に敬称が付かないのは、この場の緊張感を味わいたい多くの読者の期待に応える地の語り口なのだろう。

[第三段 浮舟の乳母、困惑、右近、中君に急報]

乳母、人げの例ならぬを、あやしと思ひて(乳母は人の気配がいつもと違うのを変に思って)、*あなたなる屏風を押し開けて来たり(西奥の屏風を押し開けて女の間の方に入ってきました)。*「あなた」は何処か。匂宮は母屋から北西廂の客人の間に入って来たのだから、その動線から<向こう>と言えば、更に西側の縁側寄りの間だろうし、其処が恐らくは乳母たちの控室に宛てられていたのだろう。ただ、少し疑問なのは、母屋から出て30cmほどに屏風があり、その屏風の脇から女の裾を掴んだというのなら、女は屏風近くに居たのであり、其処が中庭に面した北縁側に近い、というのは、母屋・廂・縁側が同心円状に配される御堂構造では成立しない舞台立てに思われる。尤も、間仕切られた一区画が非常に狭い空間だったとしたら、心理描写の比喩表現として常陸女が中庭近くに居たという言い方は有り得るのかも知れないが、屏風から手が届く距離に女が居たということは、物理上の説明なので比喩とは見做せない。が、その近さで母屋から男が出て来たことに女が気付かない、というのは説得力に著しく欠ける。それでも、丸で有り得ない話でもないのだから、現実味のある舞台設定を誰かに上手く解説して欲しい所だ。

「これは、いかなることにかはべらむ(是は何事ですか)。あやしきわざにもはべる(大変なことです)」

など聞こゆれど(などと乳母は姫の部屋に闖入した不審者に気付いて、声を上げたが)、*憚りたまふべきことにもあらず(宮は当家の主人なれば、女房に手を出すのに誰憚り給うことでもな

いので、かくうちつけなる御しわざなれど(今の所業は如何にも場当たりの為さりようではあるものの)、言の葉多かる本性なれば(女を口説く言葉に事欠かない性分なので)、何やかやとのたまふに(乳母が何と言おうと御構い無しに、何やかやのと言い寄りなさが、女が何一つと応え申せる筈もなく)、暮れ果てぬれど(すっかり日も暮れてしまったが)、*「憚りたまふべきことにもあらず」は注に<匂宮はこの邸の主人。しかも好色の性癖がある。>とある。つまり、この「あらず」は文意からして補足説明句の連用中止法なので、本文構成は読点で下に続くことになる。

「誰れと聞かざらむほどは許さじ(名前を聞かない内は手を離さないよ)」

とて(と言って宮が)、なれなれしく臥したまふに(姫君になれなれしく寄り臥しなさっている)、
「宮なりけり(宮様なのだ)」と思ひ果つるに(と不審者が分かってみれば)、乳母、言はむ方なくあきれてあたり(乳母は抗弁の仕様もなく呆然としていました)。

「*大殿油は灯籠にて(部屋灯りを燈籠に灯して下さい)、今渡らせたまひなむ(今から御方様がお戻りになります)」と人びと*言ふなり(と女房たちが言うのが聞こえます)。*御前ならぬ方の御格子どもぞ下ろすなる(御居間前の格子戸はみな下ろして閉めるようです)。*「おほとなぶらはとうるにて」は注に<大殿油は灯籠に入れて、の意。>とある。渋谷校訂は是を地文としてあるが、「灯籠」は軒下の釣り明かりなので、通路を明るくして御方の入室に備えるのは、一連の仕事であり、この語調からしても、此処も女房同士の伝達連絡事項として発言文と見て良さそうに私には思える。*「言ふなり」は注に<「なり」伝聞推定の助動詞。語り手が聞いている体。臨場感のある表現。>とある。*「おまへならぬかた」は注に<中君の部屋の前の格子以外はみな下ろす。「なり」伝聞推定の助動詞。>とある。

こなたは離れたる方にしなして(この客人の部屋は離れの物置に使っていて)、高き*棚厨子一具立て(高い戸棚一組を置き立てて)、屏風の袋に入れこめたる、所々に寄せかけ(屏風の袋に仕舞い込んだものを幾つか所々に寄せ掛けてあって)、何かの荒らかなるさまにし放ちたり(何かと雑然とした様子にされていました)。*「棚厨子(たなづし)」はざっと筆筈だろうか。「厨子」は置き戸棚のことらしいが、「厨(づ・ちゅう・くりや)」は<箱・ハコ>のことで、容器や独立空間を示すようで、「子(し・す・こ)」は<小物・小道具>を示すので、「厨子」は<物置>という言い方にも見えるが、立派な作りで大事な物を収納すれば宝物入れにもなるので、高家の物置は結構な曲者だ。「一具(ひとよろひ)」は<一組・一式>でもあろうが、「よろひ」は厨子を数える単位の語用で<一個・一棹>という言い方のようだ。

かく人のものしたまへばとて(このように客人が使いなさるという事で)、通ふ道の*障子一間ばかりぞ開けたるを(通路として衝立で仕切られていた廂の外側を)、*右近とて、大輔が娘のさぶらふ来て(右近と言って大輔の君の娘で御方に仕えている者が)、格子下ろしてここに寄り来なり(格子戸を下ろし閉めながらこの部屋に近付いて来るのでした)。*「障子(しゃうじ)」は此処では<衝立仕切り>で、「一間(ひとま)」は柱の間隔を言う単位ではなく<ちょっとした広さ>であり、それは通路になるだけの1~2尺の幅で、廂の縁に沿って取られていた空間なのだろう。*「右近(うこん)」は注に<中君付きの女房である大輔の娘、右近。『完訳』は「中の君づきの女房。後の浮舟巻の右近と同一人物か否か、古来論議のある人物」と注す。>とある。

「あな、暗や(ああ暗い)。まだ大殿油も参らざりけり(まだ部屋明かりもお点け申ししていなかったんですね)。御格子を(私が御格子を)、苦しきに(苦勞しながら)、急ぎ参りて(急いで下ろし回り申してしまうと)、闇に惑ふよ(暗くて困りますねえ)」

とて(と言って)、引き上ぐるに(閉め掛けた格子戸を引き上げるのを)、宮も(宮も邪魔が入ったように)、「なま苦し(何か間が悪いな)」と聞きたまふ(とお聞きになります)。乳母はた(乳母はと言うと)、いと苦しと思ひて(とても困ったことと思って)、ものつつみせずはやりかに*おぞき人にて(物怖じせず性急で押しの強い人だったので)、 *「おぞし」は古語辞典に「おずし」と同じとあり、「おずし」は<性格が強く激しい。強情で勝ち気である。>とある。

「もの聞こえはべらむ(申し上げます)。ここに、いとあやしきことのはべるに(此処にとても変な事がありまして)、見たまへ極じてなむ(困り果てまして)、え動きはべらでなむ(身動き取れずに居ります)」

「何ごとぞ(どうしました)」

とて、探り寄るに(と言って右近が衝立の内側を調べ寄ると)、*桂姿なる男の(直衣を脱いで寛いだ内着姿の男が)、いと香うばしくて添ひ臥したまへるを(実に芳しく姫君に添ひ臥しなさいっているのを)、「例のけしからぬ御さま(いつもの困った宮の為さりようだ)」と思ひ寄りにけり(と分かりました)。「女の心合はせたまふまじきこと(娘御が同意なさる筈はない)」と推し量らるれば(と右近には察せられたので)、 *「うちぎ」は男服では袍(ほう、上着)の下に着る<内着>のことで、女服で言う<打ち掛け着、飾り上着>とは別物、とのこと。こういう別物を同じ「桂」の字を当てるのは紛らわしいし、そも同じ「うちぎ」という言い方をする事自体が紛らわしい。注には<直衣を脱いだ姿。>とある。

「げに、いと見苦しきことにもはべるかな(確かに、是は本当に困った事でございます)。右近は、いかに聞こえさせむ(が、私は女房なので、旦那様には何も申せません)。今参りて(直ぐ御部屋に伺って)、御前にこそは忍びて聞こえさせめ(御方様に内密にご相談申します)」

とて立つを(と言って立って行くのを)、あさましく*かたはに(とんでもない不調法と)、誰も誰も思へど(姫も乳母も思ったが)、宮は懼ぢたまはず(宮は動じなさいません)。 *「かたは」は<自分の落度>なので、「たれもたれも」は当事者の姫と乳母だ。

「あさましきまであてにをかしき人かな(凄く高貴で子細有る人らしいな)。なほ、何人ならむ(さて何者だろう)。右近が言ひつるけしきも(右近が御方に言い付けると言っていたことから)、いとおしなべての今参りにはあらざめり(とても並の新参女房ではなさそうだ)」

心得がたく思されて(そうは言っても、物置住まいの女房には違い有るまいと、宮は納得が行きなさらず)、と言ひかく言ひ(あれこれ言って名を聞きだそうとするが)、怨みたまふ(応えない女に困りなさいます)。心づきなげにけしきばみてももてなさねど(女は突き放すような邪険な態度は見せないものの)、ただいみじう死ぬばかり思へるがいとほしければ(ただ辛く死にそうに恥じ入っているのが不憫なので)、情けありてこしらへたまふ(宮は優しく宥めなさいます)。

右近、上に(右近は御方様に)、

「しかしかこそおはしませ(こういう次第でございます)。いとほしく(心配ですし)、いかに思ふらむ(娘御がどんな思いでいるものか)」

と聞こゆれば(と申し上げると)、

「例の、心憂き御さまかな(いつもの困った宮の女好きの御所業ですね)。かの母も(あの母親の守夫人も)、いかにあはあはしく(何と軽率な)、けしからぬさまに思ひたまはむとすらむ(だらしないうこととお思いになることだろう)。うしろやすくと(安心してお任せくださいと)、返す返す言ひおきつるものを(何度も言い聞かせたのに)」

と、いとほしく思せど(と御方は不都合にお思いになったが)、「いかが聞こえむ(宮にはどう申し上げたものか)。さぶらふ人びとも(此処の女房でも)、すこし若やかによろしきは(少し若くて綺麗な者は)、見捨てたまふなく(見逃しなさないという)、あやしき人の御癖なれば(感心するほどの宮の女好きなのだから)。いかがは思ひ寄りたまひけむ(それにしても、如何してあの娘御に気付きなさったのだろう)」とあさましきに(と呆れるほどの宮の女への嗅覚の鋭さに)、ものも言はれたまはず(御方は言葉も無くいらっしゃいます)。

[第四段 宮中から使者が来て、浮舟、危機を脱出]

「*上達部あまた参りたまふ日にて(今日は高官の皆さんが大勢お見えになった日なので)、遊び戯れては(遊び興じて)、例も(いつもなら)、かかる時は遅くも渡りたまへば(こういう日は宮は遅く御部屋にお戻りなので)、皆うちとけてやすみたまふぞかし(女房たちも皆油断して、御方様もお休みなさるものです)。さても、いかにすべきことぞ(それがまあ、感心にも)。かの乳母こそ、おぞましかりけれ(あの乳母は気丈ですよ)。つと添ひゐて*護りたてまつり(ぴったりと姫に付き添ってお守り申し上げ)、引きもかなぐりたてまつりつべくこそ思ひたりつれ(宮様を引き離し申そうとまで思っていたのですから)」 *「かんだちめあまたまゐるたまふ」は注に<以下「思ひたりつれ」まで、右近の詞。>とある。が、これが上文の御方のクローズアップから、少し引いて同室にいる側近女房たちにカメラが振られたのなら、それなりのカメラワークを説明する文は欲しい。例えば<そんな御方を尻目に右近は>くらいの繋ぎが、何故書けないのか。脱稿が無いとしたら、作者の舌足らずに閉口する。 *「まもりたてまつる」相手は姫だろう。 *「かなぐりたてまつる」相手は匂宮なのだろう。「かなぐる」は現代語にも残っているが、「か」は強調の接頭語で「なぐる」は<押し退ける>で、強引に始末する、みたいな言い方。

と(と右近が)、*少将と二人していとほしがるほどに(同僚女房の少将という者と二人してこの事態を懸念している時に)、内裏より人参りて(御所から使者が参上して)、*大宮この夕暮より御胸悩ませたまふを(大宮が夕暮れから御胸をお苦しみの所)、ただ今いみじく重く悩ませたまふよし申さす(ただ今非常にお悪くお成りと知らせ申します)。 *「少将と」は注に<中君付きの女房と。>とある。姫の関係者に左近少将もいるので、この場面でその二人を混同することはないが、同じ名称の登場人物は非常に紛らわしい。 *「おほみや」は若君から見て祖母に当たる明石中宮らしいが、何故ここでこう呼称するのは不明。匂宮の御子はこの二条院の若君が長子だろうが、東宮にも御子はいるだろうし、まさかこの二条院の御子が

帝の初孫でもあるまいが、「大(おほ)」はそれなりの人にしか使えない尊称なので、御所では中宮は大宮と呼ばれていたのかも知れない。であれば、全体の状況が見え易い呼称かも知れないので、そのまま使ってみたい。

右近(右近は)、「*心なき折の御悩みかな(宮には生憎な母後の御病気だこと)。聞こえさせむ(お知らせ申しませう)」とて立つ(と言って立ち上がります)。*「心なき折の」は注に<以下「聞こえさせむ」まで、右近の詞。『完訳』は「匂宮には折悪しき母后のご病気だ、と戯れた言い方である」と注す。>とある。

少将(少将が)、「いでや(いえ)、*今は(もう情交が済んでいて)、かひなくもあべいことを(手遅れかも知れないので)、をこがましく(忙しく騒ぎ立てて)、あまりな*脅かしきこえたまひそ(あまり驚かせ申しますな)」と言へば(と言え)、*「今は、かひなくもあべいことを」は注に<『完訳』は「もう手遅れだろうから。すでに情交があったと、露骨に言う」と注す。>とある。*「脅かす(おびやかす)」は<怖がらせる>よりは<驚かせる>くらいの言い方らしい。

「いな、まだしかるべし(いえ、まだ間に合うでしょう)」

と(と右近が応えて)、忍びてささめき交はすを(二人がひそひそ話すのを)、上は(御方様は)、「いと聞きにくき人の御本性にこそあめれ(本当に人聞きの悪い宮の女癖なんだから)。*すこし心あらむ人は(少し気の回る人だと)、わがあたりをさへ疎みぬべかめり(私まで不注意だと非難しかねない)」と思す(とお思いになります)。*「すこし心あらむ人」は守夫人を思っているの言い方なのだろうか。実質では、薫大将に対してこそ、非常に不都合な事態かも知れない。

参りて(右近は宮の所に参上して)、御使の申すよりも、今すこしあわたたしげに申しなせば(御使者の口上よりも、もう少し誇張して大宮の大事を知らせ申しなすが)、動きたまふべきさまにもあらぬ御けしきに(宮は動揺なさない御様子で)、

「誰れか参りたる(使者は誰か)。例の、おどろおどろしく脅かす(例によって大袈裟に急ぎ立て申して)」とのたまはすれば(と仰るので)、

「*宮の侍に(中宮職の侍で)、平重経となむ名のりはべりつる(たひらのしげつねと名乗って居ります)」と聞こゆ(と右近は応えます)。*「宮の侍に」は注に<以下「名のりはべりつる」まで、右近の詞。中宮職の官人で、の意。>とある。

出でたまはむことのいとわりなく口惜しきに(宮はお出掛けになるのが非常に心残り)、人目も思されぬに(人目も憚らず女に添い臥していらっしゃるので)、右近立ち出でて(右近は廊下に出て)、*この御使を西面にて問へば(次席女房に御使者を西廂の縁側まで通して、直接宮に言上申すようにと伝えると)、*申し次ぎつる人も寄り来て(御使者の取次役の家臣も宮の側へ近付いて来て)、*「このおおんつかひをにしおもてにてとへば」は注に<『完訳』は「寝殿の南庭にいたらしい使者(平重経)を、匂宮のいる西の対の西廂の庭前に呼び出す。匂宮に直接聞かせるつもりである」と注す。>とある。が、女房の右近が中宮職の御使者に尋問できるとは思えない。匂宮が直接に話を聞きたがっている、と御使者に伝言するくらいしか出来ないだろう。この文面からは、そのようには読み難いが、一応そう読んで置く。それと、「西の対の西廂の庭前」というのが、どうも私には考え難い。当時の世情に詳しい専門家の解説なら正しいのだろうとも思う

が、私には「西の対の西廂」は邸宅の通用口の印象で、中宮の御使者が控えるに相応しい前庭があるような気がしない。それに中宮の御使者なら縁側に控えるくらいの格式があっても良さそうな気もする。いや、素人の思い付き以上のものでは無いので、特に根拠は無いが、注釈の説明も、此処の文章だけでは然程の説得力は無い。固執はしないが、今のところは御使者は縁側で、取次が西廂に居たように読んで置く。 *「申し次ぎつる人も寄り来て」は注に<『集成』は「お使いの口上を、女房に取り次いだ宮家の家臣。やはり庭上に控える」と注す。>とある。「申し次ぎつる」の「つる」は完了の助動詞「つ」の連体形だろうが、この完了意は<先に取り次いだ>ではなく<先に取り次いだ事で→取次役に定まった>という言い方と取った方が、全体の文意がまとまる気がする。

「*中務宮、参らせたまひぬ(中務宮は参内なさいました)。*大夫は、ただ今なむ、参りつる道に(中宮大夫はちょうど今、私が此処へ参ります途中で)、御車引き出づる、見はべりつ(御車で御所へ向かう所を見かけ申しました)」 *「なかつかさのみや」は注に<以下「見はべりつ」まで、使者の詞。『完訳』は「以下、取次が使者の報告を伝達」と注す。中務宮は、匂宮の弟か、とされる。>とある。中務宮は中務卿(なかつかさきょう、中務省の長官)で、中務省(なかつかさしょう)は王制国家に於いて王の意志を下達する役所だから、役割としては官房だが、君主制でのその權威の高さは他の省庁を圧倒したらしい。 *「大夫」は「だいぶ」と読みがあり、中宮職(ちゅうぐうしき、皇后政務司)の長官名とのこと。

と申せば(と御使者が取次を介して申したので)、「げに(確かに)、にはかに時々悩みたまふ折々もあるを(母宮は急にお苦しみなさる時もあるから)」と思すに(と宮はお思いになって)、*人の思すらむこともはしたなくなりて(遅参や二条院通いを養父の源氏大臣が心良くお思いにならないだろうことも不都合に思えて)、いみじう怨み契りおきて出でたまひぬ(女には非常に別れを惜しんで再会を約束してお出掛けなさいました)。 *「人」は「思すらむ」と敬語遣いなので、遅参および二条院通いを最も非難するであろう源氏大臣が意識されたのではないかと察する。

[第五段 乳母、浮舟を慰める]

恐ろしき夢の覚めたる心地して(姫君は恐ろしい夢が覚めた気分で)、汗におし浸して臥したまへり(汗をびっしょり搔いて臥せっていらっしゃいました)。乳母、うち扇ぎなどして(乳母は団扇で扇いで姫の興奮を静めながら)、

「かかる御住まひは(こうした仮宿のお暮らしは)、よろづにつけて、つつましく便なかりけり(何かと遠慮が多く不都合です)。かくおはしましそめて(こうして宮がいらっしゃった以上)、さらに、よきことはべらじ(もう、ただでは済みますまい)。あな、恐ろしや(ああ恐ろしい)。限りなき人と聞こゆとも(この上ない高貴な方と申し上げても)、やすからぬ御ありさまは(穏やかならぬお振る舞いは)、いとあぢきなかるべし(本当に心外です)。

よそのさし離れたらむ人にこそ(あなた様が御方様の縁者でないなら)、善しとも悪しともおぼえられたまはめ(宮様に気に入られようと入れまいと構いませんが)、人聞きもかたはらいたきこと(縁者への手出しは外聞も悪い)、と思ひたまへて(と存ぜられて)、*降魔の相を出だして(閻魔顔を作って)、つと見たてまつりつれば(じっと宮様を睨み付け申し上げていましたが)、いと*むくつけく(宮はそんな私を気味の悪い)、下衆下衆しき女と思して(下っ端の女房とお思いになって)、手をいといたくつませたまひつるこそ(手をひどく強くつねりなされたのが)、直人の懸

想だちて(普通の人の恋路のようで)、いとをかしくもおぼえはべりつれ(とても可笑しく存じられました)。*「降魔の相」は「ごうまのさう」と読みがあり、大辞泉に<八相の一。釈迦(しゃか)が悟りを開こうとしたとき、妨害した欲界第六天を降伏(ごうぶく)させたときの姿。がまの相。>また<不動明王などが悪魔を降伏させるときの怒りの形相。がまの相。>とある。つまりは怖い顔を作って相手を牽制した、ということらしい。仏教がらみで怖い顔を言うのなら、私には、意味が違ってしまうのかも知れないが、閻魔顔と言う方が馴染める。*「むくつけし」には<刃向い難し>の語感があると先に見たが、同時に<むさくるしい=下品な疎ましき>という語感もあって、此处では匂宮が思ったであろう、乳母自身の印象に付いての形容なので<疎ましい→気味が悪い>で良さそうだ。

*かの殿には(常陸守殿に於かれては)、今日もいみじくいさかひたまひけり(今日も非常に奥様を難じていらっしやいました)。『ただ一所の御上を見扱ひたまふとて(ただ一人の娘を世話する為に)、わが子どもをば思し捨てたり(私の子供たちの世話をしないとは)、*客人のおはするほどの御旅居見苦し(花婿がお見えになる時の御外出とは何事ぞ)』と、荒々しきまでぞ聞こえたまひける(と荒々しいほどの言い方を為さっていました)。下人さへ聞きいとほしがりけり(下働きの者でさえ聞くに堪えないようでした)。*「かの殿」は注に<常陸介邸。日頃から夫婦のいさかいが絶えない。>とある。ただ、この「殿」は<殿舎=邸宅>ではなく<殿様=常陸守>のことを指しているように思う。「いさかひたまひけり」の事象認識を示す助動詞「けり」は伝聞ではなく自身の知見を言うものなので、是は守が夫人を呼び戻すために従者を差し向けて来ていた今朝の出来事を言っているのだろう。*「まらうと」は常陸守邸に於ける客人なので花婿の左近少将を言う。注に<娘婿の左近少将が通ってくる。>とある。

すべてこの少将の君ぞ(すべてはその少将はんが悪うおます)。いと愛敬なくおぼえたまふ(ほんにえげつなう)。この御ことはべらざらましかば(今回の御変更さえ無かったら)、うちうちやすからずむつかしきことは(内輪揉めの面倒は)、折々はべりとも(有る事が在っても)、なだらかに(外聞は穏やかに)、年ごろのままにておはしますべきものを(今までどおりの関係で暮らしていられしたものを)」

など、うち嘆きつつ言ふ(などと愚痴っぽく宥めます)。

君は(姫君は)、ただ今はともかくも思ひめぐらされず(差し当たっては何とも考えがまとまらず)、ただいみじくはしたなく(ただ非常に極まり悪く)、見知らぬ目を見つるに添へても(思いも寄らない目に遭ったことに加えて)、「いかに思すらむ(義姉がどうお思いになることか)」と思ふに(と思えば)、わびしければ(悲しくて)、うつぶし臥して泣きたまふ(うつ伏してお泣きになります)。いと苦しと見扱ひて(乳母は姫がとても辛いと思って)、

「何か、かく思す(何もそう嘆かれますな)。母おはせぬ人こそ(母のいらっしやらない人こそ)、たづきなう悲しかるべけれ(頼りなく悲しいものです)。よそのおぼえは(世間体からすれば)、父なき人はいと口惜しけれど(父の無い人はとても不利ですが)、さがなき継母に憎まれむよりは(意地悪な継母に辛くされるよりは)、これはいとやすし(よほど気楽です)。ともかくもしたてまつり*たまひてむ(今後のことは母君が何とかして下さいます)。な思し屈ぜそ(気を落としなさいますな)。*「たまひてむ」の「たまふ」は母君に対する敬語。「たまひ」は八行四段活用の連用形。乳母の謙譲語な

らハ行下二段活用で連用形は「たまへ」となる。「てむ」はくということになるだろう>という結果の予測だから、強い説得意の表現だ。

さりとも(それに何と言っても)、初瀬の観音おはしませば(あなた様には、長谷の観音様がついていらっしゃるから)、あはれと思ひきこえたまふらむ(同情してお守りくださるでしょう)。ならばぬ御身に(馴れないお御足で)、たびたびしきりて詣でたまふことは(何度も熱心にお参りなされたのは)、人のかくあなづりざまにのみ思ひきこえたるを(人がこのようにあなた様を軽んじたようにばかり思い申すのを)、かくもありけり(これほどの人だったのだ)、と思ふばかりの御幸ひおはしませ(と思うほどの御幸運がありますように)、とこそ念じはべれ(と願ってのことです)。あが君は、人笑はれにては、やみたまひなむや(私の姫君が笑い者で終わりなされる筈がありません)」

と、世をやすげに言ひみたり(と心配ないように慰めていました)。

[第六段 匂宮、宮中へ出向く]

宮は、急ぎで出でたまふなり(宮は急いでお出かけなさるようです)。内裏近き方にやあらむ(御所に近い方ということらしく)、*こなたの御門より出でたまへば(此方の北西門から御出発なさるので)、もののたまふ御声も聞こゆ(何か仰る宮の声が姫にも聞こえます)。いとあてに限りもなく聞こえて(とても優雅この上もなく聞こえて)、*心ばへある古言などうち誦じたまひて過ぎたまふほど(恋心の古歌など楽しそうに朗詠なさってお出掛けなさるのを)、すずろにわづらはしくおぼゆ(姫は思わず不快に聞きます)。*移し馬ども牽き出だして(予備馬を何頭も馬屋から引き出して)、宿直にさぶらふ人(宿直仕えする従者を)、十人ばかりして参りたまふ(十人も連れて参内なさいます)。*「こなたのみかど」は西の対に続く中門廊かと思っただが、下文に「もののたまふ御声も聞こゆ」とあり、西の対の北西廂に居る常陸女に宮の声が聞こえるほどの近さだとすれば、邸宅北西にあるらしい通用門のことでなければ変だ。*「こころばへあるふること」はどういう「心ばへ(趣向)」なのか。下に「すずろにわづらはしくおぼゆ」と姫が嫌がっているのも、思いも掛けずに好い女に出会った、みたいな遊び歌と見るのが分かり易いが、姫が遊女気分になったというのは言い過ぎだろうから、まあざっと艶な恋歌とでも言って置けば無難か。*「移し馬(うつしむま)」は<従者の乗換え用の予備の馬>のことで、宮の殿居に付き従う供人用らしい。他の従者は一旦御所から引き上げるという事情から、こうした準備が必要なのだろうか。しかし、御所と二条院は特に何かを言うほど遠く離れてはいない。それに、宿直も珍しいことでもなく、こういうことは普通の日常的な様態かと思われ、私のような物を知らない者にとっては丁寧な説明で有難いが、此処で是を言う意図は何かあるのだろうか。常陸女にしても、地方官家とはいえ貴女なのであり、似たような光景を見た事もないとも思えないが、それでも「十人」はやはり破格の多さだったか。

上(御方様は義妹が宮の無体を)、いとほしく(迷惑で)、うたて思ふらむとて(困っているだろうと)、知らず顔にて(そのことには触れずに)、「うへいとほしく」の文意について、注には<中君は浮舟が。『完訳』は「浮舟が彼女の不快を忖度するのは逆に、中の君は浮舟に同情し、その苦衷を想像する」と注す。>とある。「同情」と言えるのかどうかは分からないが、御方には姫に対して管理者責任はあるだろうし、事情を知る必要は、どういう立場に立つにしても、自身が主要な関係者なのだから、必ずあるわけで、姫の状態や意向は確認しなければならない。そういう意味で二人の接し方は興味深い。

「大宮悩みたまふとて参りたまひぬれば(宮は大宮がご病気ということで御見舞に参内なされたので)、今宵は出でたまはじ(今宵はお帰りなさいませぬ)。*泔の名残にや(洗髪した所為か)、心地も悩まして起きぬはべるを(気分が落ち着かず起きて居りますので)、渡りたまへ(話し相手に来て下さい)。つれづれにも思さるらむ(退屈でしょう)」 *「泔(ゆする)」は<洗髪>。

と聞こえたまへり(と誘い申しなさいました)。

「乱り心地のいと苦しうはべるを(気分がとても悪いので)、ためらひて(落ち着いたら、伺います)」

と(と姫君は)、乳母して聞こえたまふ(乳母を介してお応えなさいませぬ)。

「いかなる御心地ぞ(何処がお悪いのですか)」

と、返り訪らひきこえたまへば(と御方が折り返し尋ね申しなされると)、

「何心地ともおぼえはべらず(何処ということもなく)、ただいと苦しくはべり(ただとても苦しくございませぬ)」

と聞こえたまへば(と姫がお答えなされると)、少将、右近目まじろきをして(少将と右近は目配せして)、

「かたはらぞいたくおはすらむ(極まり悪くお思いなのでしょう)」

と言ふも(と言うのも)、ただなるよりはいとほし(ただの御不調でないことは分かっています)。

「いと口惜しう心苦しきわざかな(とても残念で不都合な事態です)。大将の心とどめたるさまにのたまふめりしを(大将が感心があると仰っていたのに)、いかにあはあはしく思ひ落とさむ(宮が先に手を付けなされたのでは、大将は義妹をどんなに軽薄な女と見下しなされるだろう)。

かく乱りがはしくおはする人は(このように女にだらしなくいらっしゃる宮のような人なら)、聞きにくく(聞くに堪えない)、*実ならぬことをもくねり言ひ(あらぬ疑いで難癖を付けたりもするが)、またまことにすこし思はずならむことをも(逆に少々気に入らない他人の親しさでも)、さすがに見許しつべうこそおはすめれ(拘らず見逃す事もおありだろうが)、この君は(大将の君は)、言はで憂しと思はむこと(口に出さずに嫌に思うことを)、いと恥づかしげに心深きを(傍が気遣うほど心に秘めるので)、あいなく思ふこと添ひぬる人の上なめり(気懸かりな事情が加わった義妹の身の上になったようだ)。 *「じつならぬこと」は<情交の無い御方と薫大将との仲>。「くねり言ふ」は<曲げて言う=あらぬ疑いを掛けて、難癖を言う>。

年ごろ見ず知らざりつる人の上なれど(長年見ず知らずに来た義妹のことだが)、心ばへ容貌を見れば(気立てや容貌を見れば)、え思ひ離るまじう(忘れられず)、らうたく心苦しきに(可愛く気懸かりなのに)、世の中はありがたくむつかしげなるものかな(女が生きるのは大変で複雑なものだ)。

わが身のありさまは(自分の身の上は)、飽かぬこと多かる心地すれど(満足できないことが多い気はするが)、*かくものはかなき目も見つべかりける身の(この義妹のように力無い使用人扱いの目に遭っても仕方の無い親無し子でありながら)、さは、*はふれずなりにけるにこそ(そのようには放浪せずにいるのは)、げに、めやすきなりけれ(本当に良かった)。今はただ(後はただ)、*この憎き心添ひたまへる人の(故姉君に執着なざる面倒な大将殿が)、なだらかにて思ひ離れなば(穏やかに私から離れれば)、さらに何ごとも思ひ入れずなりなむ(一切面倒は無くなるだろうに)」 *「かくものはかなき目も見つべかりける身」は注に<『集成』は「この妹のようにつまらぬ目に会うかもしれない身でありながら。匂宮などから、人並みでない扱いを受けること」と注す。>とある。 *「はふる」は「放る」と古語辞典に表記があり<見放す。放浪する。>ということらしい。 *「この憎き心添ひたまへる人」は注に<薫。中君への懸想心のあるのをいう。>とある。とても分かり難い言い方だが、文意は通るので従う。

と思ほす(とお思いになります)。いと多かる御髪なれば(とても多い御髪なので)、とみにもえ乾しやらず(直ぐにも乾かせず)、起きみたまへるも苦し(起きていらっしゃるのも大変です)。白き御衣一襲ばかりにておはする(御方は白い着物の一揃い姿でいらっしゃって)、細やかにてをかしげなり(細身で風情があります)。

[第七段 中君、浮舟を慰める]

この君は(姫君は)、まことに心地も悪しくなりたれど(本当に熱っぽくなっていたが)、乳母(乳母は)、

「いとかたはらいたし(このままでは、傍目に悪すぎます)。事しもあり顔に思すらむを(情事があったように御方様がお思いになりますので)。ただおほどかにて見えたてまつりたまへ(ただ平然とお目通り申しなさいませ)。右近の君などには、事のありさま、初めより語りはべらむ(右近の君には事情を初めから聞いて頂きます)」

と、せめてそそのかしたてて(と姫を急き立てて促して)、こなたの障子のもとにて(御部屋の襖戸口で)、

「右近の君にももの聞こえさせむ(右近の君にお話しがございます)」

と言へば(と乳母が言えば)、立ちて出でたれば(右近が出て来たので)、

「いとあやしくはべりつることの名残に(とても変なことがございました所為で)、身も熱うなりたまひて(姫君は熱を出しなさって)、まめやかに苦しげに見えさせたまふを(本当に苦しそうにお見えになるのを)、いとほしく見はべる(お可哀想に存じまして)、御前にて慰めきこえさせたまへ、とてなむ(御方様にお慰め頂きたく存じます)。過ちもおはせぬ身を(実事無くいらっしゃる御事情を)、いとつつましげに思ほしわびためるも(とても極まり悪くお思いで困っていらっしゃるのも)、*いささかにても世を知りたまへる人こそあれ(少しでも経験がお有りの人であれば何でも無いことを)、*いかでかはと(どんなに大変なことかとお思いなればこそで)、*ことわりに(それが処女の証明かと)、*いとほしく見たてまつる(姫の御無事を大事に思い申し上げる次第です)」 *「いささかにても世を知りたまへる人こそあれ」は下に<ば、左に非ずも>くらいが省かれた、聞き

手の察し・付度を期待する言い回しなのだろう。*「いかでかはと」は下に<動じたまふが>などが省かれた主語が姫の文だろう。*「ことわりに」は「過ちもおはせぬ身を」を受けていて、「いとつつましげに〜いかでかはと」は挿入句と見做せる構文だろう。*「いとほし」は右近への説得というか念押しの語用だろう。

とて(と乳母は右近に話して)、引き起こして参らせたてまつる(姫の頭を上げさせて御部屋にお入れ申し差し上げます)。

我にもあらず(姫は考えもまとまらず)、人の思ふらむことも恥づかしけれど(女房たちの目も気が引けたが)、いとやはらかにおほどき過ぎたまへる君にて(とても温厚で受身一方の方なので)、押し出でられて居たまへり(乳母に押し出されて御方の前にお座りなさいます)。額髪などの、いたう濡れたる、もて隠して(姫は寝汗で額髪がだいぶ濡れているのを隠そうとして)、灯の方に背きたまへるさま(火の方に背中を向けていらっしゃる姿は)、*上をたぐひなく見たてまつるに(御方をこの上なく美しいと思ひ申し上げる女房たちの目にも)、け劣るとも見えず(少しも劣るとも見えず)、あてにをかし(上品で美しい)。*「上をたぐひなく見たてまつるに」は女房視線なので、如何にも女房語りの臨場感ある言い回し。

「これに思しつきなば(宮がこの人に目を付けなされたのなら)、めざましげなることはありなむかし(相当面倒なことになりそうです)。いとかからぬをだに(これほどの人でなくても)、めづらしき人(目新しい女には)、をかしうしたまふ御心を(目がない宮ですから)」

と、二人ばかりぞ(と右近と少将の二人は)、御前にてえ恥ぢたまはねば(御方の前であることから姫が顔を隠していらっしゃれないので)、見みたりける(見入っていたのです)。物語いとなつかしくしたまひて(御方は姫にとっても優しく話しかけなさせて)、

「例ならずつつましき所など(自宅と違って遠慮される所と)、な思ひなしたまひそ(お思い為さいませんように)。故姫君のおはせずなりにしのち(姉君が亡くなってから)、忘るる世なくいみじく、身も恨めしく(忘れることなく残された我が身が非常に悲しく)、たぐひなき心地して過ぐすに(例えようもなく寂しい気持で暮らしていますので)、いとよく思ひよそへられたまふ御さまを見れば(姉君にとってもよく似ていらっしゃるあなたの御姿を見れば)、慰む心地してあはれになむ(懐かしくて感慨深く思われます)。思ふ人もなき身に(他に縁者もない私なので)、昔の御心ざしのやうに思ほさば(姉君同様に私と姉妹づきあいをしてくれたら)、いとうれしくなむ(とても嬉しいのです)」

など語らひたまへど(などお話しなさるが)、いともつつましくて(姫はとても極まり悪く)、また鄙びたる心に(また田舎者の引け目からも)、いらへきこえむこともなくて(御方の話に合わせて答えなさることが出来ず)、

「年ごろ、いと遙かにのみ思ひきこえさせしに(長年、とても遠い尊い方と思ひ申してまいりましたので)、かう見たてまつりはべるは(こうしてお目にかかれることは)、何ごとも慰む心地しはべりてなむ(全て報われる気がしております)」

とばかり、いと若びたる声にて言ふ(とだけとても緊張した上ずった声で言います)。

[第八段 浮舟と中君、物語絵を見ながら語らう]

絵など取り出でさせて(御方は女房に物語絵を取り寄せさせて)、右近に詞読ませて見たまふに(右近に詞書を読ませて御覧になると)、向ひてももの恥ぢもえしあへたまはず(姫も向かい合つて恥ぢかしがっても居られなさらず)、心に入れて見たまへる灯影(御方に肩寄せて絵に見入りなさる御顔立ちは)、さらにここと見ゆる所なく(全く何処と言って欠点がなく)、こまかにをかしげなり(肌はきめ細やかで美しい)。額つき、まみの薫りたる心地して(額の形や目元に憂いがある)、いとおほどかなるあてさは(とても控え目な上品さは)、ただそれとのみ思ひ出でらるれば(もう故姉君に瓜二つで)、絵はことに目もとどめたまはで(御方は絵には目も止めなさらずに)、「絵など取り出でさせて」は注に<『完訳』は「この時代の物語鑑賞の実態を示す場面。絵を見ながら、女房の音読する物語の本文を聞く趣である」と注す。>とある。巻物なのか、綴じ本なのか、一枚絵なのかは不明だが、物語絵ではあるらしい。

「いとあはれなる人の容貌かな(実に印象深いこの人の顔立ちだ)。いかでかうしもありけるにかあらむ(如何してこんなに似ているのだろう)。故宮にいとよく似たてまつりたるなめりかし(故宮にととてもよくお似申しているようだ)。故姫君は、宮の御方さまに(姉君は父宮に)、我は母上に似たてまつりたるとこそは(私は母上にお似申していると)、古人ども言ふなりしか(古女房たちは言っていました)。げに(本当に)、似たる人はいみじきものなりけり(似ている人は特別に思えます)」

と思し比ぶるに(と家族を思い比べては)、涙ぐみて見たまふ(涙ぐんで姫を御覧になります)。

「*かれは(かの人)は、限りなくあてに気高きものから(この上なく気品ある姿勢で自意識も高いものの)、なつかしうなよよかに(優しく柔和で)、かたはなるまで(度が過ぎるほど)、なよなよと*たわみたるさまのしたまへりし*にこそ(弱弱しく押し曲げられたりしていらっしゃったものですが)。*「かれ」は故姉君らしい。*「たわむ」は<曲がる>。相手の強引さに負けて押し込まれてしまう、みたいなことだろうか。相手とは薫君だろうが、此処ではあくまで姉君の性格として、相手は不特定の一般化した言い方をしている。*「にこそ」の「に」は「なよよか」を説明する理由を示す格助詞で、「こそ」の強調は内心文でもあり説得意よりは故君への親しみから来る愛着意なのだろう。また、この「こそ」は「かれは」と比較対象のひとつを想定した文意に於いて、以下に「これは」ともう一方の比較対象を考察する際の論点を指摘する係助詞を文意してもいいので、此処で読点を打って下に続ける構文と見做すことも出来そうだが、その係助詞の文意は文脈として引き継いで、此処では愛着意から一呼吸置く文末の句点で読むくらいの、ゆっくりした間がありそうだ。

これは(この人は)、*またもてなしのうひうひしげに(そういう姉君の優柔さとは違って、応対に物馴れず)、よろづのことをつつましようのみ思ひたるけにや(とにかく遠慮勝ちにばかりしている所為か)、見所多かるなまめかしさぞ劣りたる(風情ある情趣に欠ける)。ゆゑゆゑしきけはひだにもてつけたらば(物慣れて教養素養を身につければ)、*大将の見たまはむにも、さらにかたはなるまじ(大将の眼鏡にもきつと適うことだろう)」 *「また」は上文の「こそ」を受けて、故姉君の物腰の優柔さとの比較論点を示す副詞だ。 *「大将の見たまはむ」は<大将の御眼鏡>で、結局はこの御方の考察が薫大将への当てに適うかどうかという論旨だったことの明示だが、それはこの義妹を故姉君の身代わりとして薫殿に宛

がうという最初からの目論見からして当然の発想であり、姉君を引く時に一般化したのも、姉君への懐かしさに浸りたい言い回しであって、論旨は一貫していた。

など(などと御方は)、*このかみ心に思ひ扱はれたまふ(取持ち役としてこの義妹を御覧になります)。*「このかみごころ」は<年長者の配慮>という言い方のようだが、御方には計算があるので、義妹の幸せだけを願う姉妹の慈愛というわけではないだろう。むしろ管理者意識だ。

物語などしたまひて(御方は義妹に故姉君の人柄や薫殿との事情などあらましを話し聞かせなさり)、暁方になりてぞ寝たまふ(明け方近くになってお休みなさいます)。かたはらに臥せたまひて(横に義妹を寝かせなさって)、故宮の御ことども(亡き父宮の話題で)、年ごろおはせし御ありさまなど(生前の御様子など)、まほならねど語りたまふ(一部ながら話し聞かせなさいます)。いとゆかしう(義妹は実の父の話をととても興味深く思い)、見たてまつらずなりにけるを(お会いせず終いだったことを)、「いと口惜しう悲し(本当に残念で悲しい)」と思ひたり(と思いました)。「ものがたり」は外形上は二人で話し込むのだろうが、実際には話し合うのではなく、御方が常陸女に一方的に話し聞かせたのだろう。で、御方の意図としては、義妹にある程度の因果を踏まえてもらいたい筈なので、故姉君に義妹が似ていることから、薫大将が如何に義妹に興味を持っているのか、ということ、それは以前から母君を通して知らされていたことだろうが、この際に改めて、御方から直接義妹に知らせることの意味は大きいだろうし、何処までかは分からないが、更に詳しい事情を聞かせたに違いない。上文からの流れからはそう読めるし、それ以外の話で、この時点でのこの二人が夜明け近くまで話し込める話題があるとは私には思えない。

昨夜の心知りの人びとは(昨夜の、匂宮が常陸姫に近付いた事情を知る女房たちは)、

「*いかなりつらむな(御方と常陸姫との話は、どうなったんでしょうね)。いとらうたげなる御さまを(とても可愛らしい姫さまを)、いみじう思すとも(御方様がどんなに大事にお思いでも)、甲斐あるべきことかは(宮様の御手付きとなってしまつては、大将殿に宛がう当ては外れてしまったし)。いとほし(姉妹で宮を取り合うのも、面倒な話だし)」 *「いかなりつらむ」の「らむ」は未来予測なので、「いかなりつ」は<方針がどう決まったのか>という言い方なのだろう。匂宮と常陸女との実情がどうだったのか、ということも非常に重要だが、それも含めて、今後の人間関係がどうなるのか、その見通しを得たい、というのが女房たちの立場では直接の業務に関わる話題だ。

と言へば、右近ぞ(と言うと、右近が言います)、

「さも、あらじ(そうでもないでしょう)。かの御乳母の(あの乳母さんが)、ひき据ゑて*すずろに語り愁へしけしき(私をつかまえてとにかく訴えるところでは)、*もて離れてぞ言ひし(実事は無いと言っていました)。宮も、*逢ひても逢はぬやうなる心ばへにこそ(宮も、知り合えただけのような意味の古歌を)、うちうそぶき口ずさびたまひしか(口ずさんでいらっしやいましたし)」 *「すずろに」は<漫然と、唐突に、不意に、何気なく>という語用もあるようだが、此处では右近が唐突な印象を受けるほど、乳母が<凄い勢いで、とにかく、さかんに、しきりに>訴えていた、ということなのだろう。*「もて離る」は<関係ない→実事が無い>。注には<匂宮との肉体関係を否定。>とある。 *「逢ふ」は<面会する>であり<逢瀬を契る=情交する>でもある。

「いさや(いえ)。ことさらにもやあらむ(わざとそう言っているのかもしれませんが)。そは、知らずかし(それは分かりませんよ)」

「昨夜の火影のいとおほどかなりしも(昨夜の火影で間近に拝した姫のととてもおっとりした表情からも)、事あり顔には見えたまはざりしを(実事があったようには見えませんでした)」

など、うちささめきていとほしがる(などと女房たちはひそひそ話で関心を寄せます)。